ウチの倉庫の地下に神殿がある件について説明を求む

スリザス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ウチの倉庫の地下に神殿がある件について説明を求む

【Ｎコード】
Ｎ９１４０Ｚ

【作者名】
スリザス

【あらすじ】
前世が日本人で異世界転生したが、村八分で貧乏極まって自殺寸前。
そんな悲惨な境遇の開き直り型主人公がひょんなことから幼女な神様の使徒に。
色んな能力を貰ってダンジョンで暴れまくり、治癒能力やアイテムで怪我人や病人を治したり、商売をして優秀な部下を得て、領地を手に入れて内政したりして活躍する予定。
しかし元の村ではあい変わらずつまらない村人たちに迫害され続け

る物語。

※ただの暇つぶしの殴り書き作品です。
ハイリスクノーリターンノークレームの軽いノリでお楽しみください。

第1話　胎動

よく小説とかで転生とか生まれ変わりとか聞くけど、俺はそういうものは信じていなかった。

死んだら人間はそれまで。赤子でもわかる真理のひとつだ。

大体にそんな誰もかれもが生まれ変わっていたら、何十代もの大昔の記憶とかが延々と残っててまったく思い出さないとか実際おかしいだろ？

まあそれ以前に記憶は脳にあるもので、生まれ変わりで前世の記憶とかがある方がもっとおかしいと思うんだが……

何が言いたいかというと……

「何で俺に前世の記憶があるんだよ！」ってことだ。

前世の記憶、俺が日本という国に生まれ、牛丼のサンボでワンコインで大盛りを頼み、そして暴走トラックに撥ねられて死んだまでの人生の記憶。

気楽な小説の中では転生なんて好物ですとか言われてそうだが、自分で経験してみるとこの記憶は今の世界、なんというか異世界っぽいところでは邪魔モノでしかなかった。

何しろ赤ん坊の頃からぼんやりとだが自我があった。そのせいで日本人としての精神ではちょっと耐えにくいようなことが次々と経験させられ……

生きてる芋虫を食べさせられたのはカルチャーショックどころではなかったよ。今では気にせず食べられるけど。

他にも笑わない子とかのレッテルをつけられ、下手に日本語の下地があるおかげで言語の習得が平均よりだいぶ遅れたり、素直に子供として振舞えないから何を考えてるかわからないとか裏で何してるかわからないとか、西洋人が日本人を、田舎の人間が都会の人間を表現するような評価をいただきまくったり、色々と酷い人生を送ってしまった。

日本人の知識を利用してチートしまくり？

まったく無理。

というか無理。

絶対無理。

ちょっと考えればわかると思うが、清く正しいヘタレ日本人が中世レベルのところに転生して幸せに生きられるかと。

ほんのちょっとでも周りと違うことをするとすぐ注目される。その

注目ってのも悪い意味での注目だ。いわゆる魔女裁判のような雰囲気になる。

算術が出来れば就職できる？

就職が出来るのはお偉いさんの身内とそのご機嫌をひたすら取れるクズのみ。

むしろ高度な能力なんて見せたら、拉致されて奴隷として高値で売られて一生無賃で働かされるだけだ。

ここら辺のクズさ加減は、前世の世界となんら変わらない。

出来ることと言えば周りと同じことをするだけ。

それも力仕事ばかりで理系人間の俺にはついていけず、無理をしすぎて半病人のような状態で今まですごしてきた。

ま、その話は今は置いておいてもかまわない。ぶっちゃけ今そんなことを気にしてる状態じゃあない。

わかりやすく言うと「村八分されてて、親が行方不明で、我が家の経済状態が最悪で、体調も悪くて、夜逃げ寸前だけど逃げる場所も無い」という感じ。

もうどうしようもない。

左手に首を吊るロープがスタンバってるんだ。

あまり仲が良いとも言えない両親は、半年前に二人で王都に出稼ぎに行ったがそれ以降なんの連絡も無い。

兄貴がいたが俺が5歳のころに魔物にやられて死んだ。

つまり身寄りが一切無い。

「おわた。人生またおわった。神様つまらない人生をありがとう」

でも最後になんか美味しいものでも食べたいな。

裏手にあるみすぼらしい倉の中から売れるものとかを物色するか。

どうせ売るのも面倒になるような値段のゴミしかないんだろうけど……ね。

今までダルくて調べなかったような物資もすべて調べまくるために、荷物は全部外に出すようにする。

かなり大掛かりな物色だ。子供の頃から探検みたいに何度もしてるが流石にここまで大げさにしたことはない。

何か良い値段で売れるものでもあれば……と期待はするが、内心では殆ど諦めている。

今こうして倉庫を調べてるのも、結局は惰性みたいなものだ。

でもま、何もしないよりは気が晴れる。

そしていくつかの剣や篭手やらのあまり高価でなさそうな冒険者用の装備以外はボロ布や木製のガラクタなど大したものも見つからず、最後の荷物を調べる。

「何だこの箱、重すぎる。　いや、これ床に引っ付いてるのか」

動かそうとしたときの感覚が、重いものとしては何か違和感が感じる。

中がまるで空っぽのような感じの頑丈な木箱の蓋を開けてみると予想外に軽く開いた。

「なんですか、コレは……」

どう見ても階段。

斜め横から見ても上から見ても階段。

多分、前と真横からだと木箱にしか見えないが。

おそらく地下室へと繋がっているんであろうと思われる階段の奥は、光ゴケでも使われているのかボンヤリと明かりが見える。

いったいその先に何があるのか。

予想その1はお宝がザックザクと。あるわけないだろと自分でツッコミいれられるが。

予想その2は親父の隠し酒蔵だが、隠す意味あるのか微妙？

予想その3は迷宮。うちの倉はダンジョンの上にたっていた！　わけないよね。

危険があるかもしれないので、見つけた装備を適当に身につけてから降りることにする。

「さて、鬼が出るか蛇が出るかいっちょ行ってみるか」

第2話　受肉

「うおおおおおおぉぉぉ、凄いなこれ」

階段は予想以上に狭くて長かったが、特に問題なく最深部まで到達。１００畳以上あるような広さの部屋の入り口から中を眺めると、高価な明かりの魔道具によって煌々と照らされる純白の石つくりの壁面、そして中心後ろよりに設置された荘厳なつくりの祭壇。

そこはまるで以前にクラスの取得のために行かされた神殿のような雰囲気がする場所だった。

ちなみに取得したクラスは〈村人Ｆ〉である。村人にもランクがあってＦは貧民みたいなものさ。ハハハ。

あまりの光景に数分ほど呆けていたが、とりあえずお邪魔しますと小声でいいながらオズオズと部屋に入っていく。

入り口からもみえていたが、祭壇の御神体はどうやら女神様のようで、槍を持った凛々しい戦乙女のような大きな彫像が異彩を放つ。

祭壇への緩い階段を昇ると、その御神体の大きさに圧倒され、まるで実際に神様の前に連れられて右往左往するちっぽけな人間のような感覚になる。

そんな雰囲気に流されてではあるが、唯一知っているこの世界での神への祈りの聖句を思わず口ずさんで祈りをささげる。

「いあ　いあ　くとぅるふ　ふたぐん！　……」

そして何かわけのわからない達成感を得つつも、いったん今後のことを考えるために帰ろうと祭壇を降りると、視界の隅のテーブルのような場所の上にさっきまでは無かったはずの彩りが見える。

「ん？　なんだ？」

一見してみると果物や肉、っていうか食料に見える。一応近づいてみるとやっぱりなぜか食料が山盛りに置いてある。しかもかなりの高級品ばっかりに見える。この世界で17年生きてきたがいつも芋と雑穀と野草ばかりで、ここまでの高級品はそう何度も食べた記憶すらない。

「これってもしかしてお供え物だよな。でも誰がいつの間に持ってきたんだ、さっきは絶対に無かったはずなのに」

そういって姿形がリンゴもどきのティーアコと呼ばれる果物を手にとって見る。

（うーん、凄い良い香り。すみません、もう我慢できません）

空腹もあいまって、ついつい口に運んでしまう。

大きなティーアコにかじりつくと、リンゴとオレンジの合わさったようなみずみずしい味が口の中に広がって、久しぶりの美味に歓喜が生まれる。

それからはもう、俺は飢餓感に押されて堰が切れたように完全に無心のままひたすら涙を流しながら貪るように食い漁った。

そして腹も膨れてもう食べられないといった状態になると、途端に正気を取り戻す。

「俺はなんてことを……神様への供え物を横取りとか、神罰下るぞ……」

しかし何でこんな隅のほうに供え物が置いてあるのか。

普通は祭壇の方に供えるはずでは？

もしかしてお供え前にいったん置いてあるだけか？

とりあえず食べてしまったからには仕方ない。

俺は開き直ってはみたものの、このままやってしまったことを捨て置くには堪えられない心境だったので、自分なりの誠意を見せようと、まだ半分以上余っている食料のうちのいくつかを見繕って抱え、

「すみません、神様。お供え用の料理を作ってまいります」

と、一応逃げるわけではないと宣言をしてから階段を上がって家にまで戻る。

そして台所の竈に火を起こしながら、作る料理の内容を決めていく。

（燻製肉は塩気が強いからこのままじゃ食べにくいだろう。なら削り取ってスープのダシにしようか。後、この粉物はパンを焼こうかな。日本で食べたような柔らかいものは無理だろうが焼きたてはおいしいはず。それとこっちの野菜は干しキノコからダシをとって浅漬けにしてみようか）

和洋中華がごちゃまぜだが、もう気にしない。

第一、日本の定食屋のメニューとか弁当とかもそういう部分はめちゃくちゃだったし。

感性が日本人なんだから仕方ないだろ？

元日本人舐めんなよって意気だ。

そしていままで材料すらなかった為に発揮できなかった日本人としての食への拘りをフルに発揮して渾身のメニューを作り上げる。

「出来た！　これが俺の究極のフルコースだ！」

まあそこまで言うほどのものでもないが、日本人としての感性で作ったから、この世界でのまずい食文化からは多少は逸脱したものが作れたはず。

特にさっき味見した、白身魚のフライのタルタルソース添えとかはこっちにはまず無い料理で絶品である。

一応来客用の食器に盛り付けたがやはり供え物としては食器が微妙に見える。

だがせいいっぱいの努力はした。

後は冷めないうちに持っていくだけだ。

祭壇の部屋への階段を足早に降りていくが、何故か普段より体調がよくて足取りが軽い。

おそらくあの時たらふく食べたせいだと思う。

栄養素が足りなかったんだろうな、色々と。と今までのあまりの自分の貧しさに今更ながら呆れてくる。

前に聞いたことがあるが、日本人は昔は寿命が５０年だったらしい。

それだけ食べ物ってのは体調に直結する。

それに未開人は薬が異常に効きやすいってのとかも関連して、必要な栄養分が色々と足りなかったために今回過剰に体調と栄養摂取が直結したんだろう……

「お待たせしました。神様」

返事がかえってくるはずもないが、一応気分として口に出しながら祭壇の台の上に料理を捧げる。

そもそも殆どの宗教が、返事もしない神様に祈りをささげてるのだから俺がこうして神に語りかけても可笑しいと言われる筋合いも無いだろう。

「神様の為に精一杯がんばって料理をさせていただきました。気に入ってくださりましたら先ほどの無礼はどうかどうか水に流してくださるようお願いします～」

大げさにジェスチャーを加えながらひたすらペコペコと謝る。

「で、では、ごゆっくり」

なんだか態度にレストランのウェイターとか怪しいホテルの従業員とかが若干混じっているようだが、気にせずに強引にすます。こういうのは勢いが重要なのだ、そうに決まってる。

とりあえず逃げ帰るように部屋の入り口のほうまで後退した俺は――

――

祭壇のところに設置されている高さが人の背丈ほどもある鏡、いわゆる姿見から――

なにやらちんまい幼女が、ごく自然と現れて、俺の作った料理をパクっとほおばるのを

――見た――

第3話　邂逅

えええええ、なにしてくれちゃってるのこの幼女は。

いや、というかむしろこの娘が神様？

た、確かになにか神々しい感じはするけど、御神体とかけ離れすぎだろう？

身長とか、特に胸のボリュームとかがＡ－からＨ＋までかけ離れてる。どっちがＡ－かは察しろ。

とりあえず状況把握の為に祭壇そばまでにじり寄る。

特に警戒される様子もなく、なんというか緊張感の欠片もなさそうな雰囲気だったので更にそばまで近寄った。

こぼれるような無邪気な笑顔でこちらを見つめる女神様？

近くで見ると、あの有名な〈赤さんの成長後〉と噂された写真の美

少女のような顔立ちである。実際は違うらしいが。
こちらは金髪、いわゆるブロンドヘアーだけどね。
あ、ほっぺにタルタルソースついてる。

「え、えーと、お味のほうはどうでしょうか？」
「おいしい！」
「そ、そうですか」
「おいしいね、これ～」

そういってちんまい女神様が食べてるのは俺の渾身の作である、白身魚のタルタルソース添えだ。

あ、今度は鼻の頭にタルタルソースがついた。

「お兄ちゃん、料理上手なんだ？」

これは、この眼はあれだな。よく小学生とかに一発芸とかを見せると妙に興奮してウケられて、そのまま尊敬されもみくちゃにされ、おまけに膝を蹴られまくるアレだ。

「えーと、はい……ありがとう？」

天使のような笑顔でパンにパクつく女神様。

ダメだ……あまりの状況に俺の頭はパニック寸前でどうにも事態の把握が不可能である。

この状況は、これからいったいどうすれば良いんだ……

解決の糸口になりそうなこの幼女は食事に夢中で会話になりそうも無い。

というか、この無邪気な笑顔には、色んな質問とか小難しい理屈とかがまるで通用しそうに無い。

ぶっちゃけて言うならば、手持ち無沙汰でこの場に居るのが苦痛である。

もうさあ、この幼女様が食事に一息ついたらストレートに聞いてみるしか方法はないんじゃないか。

というわけでしばらくウニウニとしながら（チクチクと刺されるような心地で）まってみて、ここぞというタイミングを計って聞いてみた。

「あ、あのー」

「なーに？」

「もしかして……貴方が女神様ですか？」

「うん！」

「おおお、やっぱり。あまりにも御神体とあんなとことか……」

ヤバっ、最後のほうとか小さな声で言ったのに、今一瞬幼女様の眼が凍ったように見えたよ。この話題は禁句ですね。

「そ、そうだ。実は先ほどあそこのテーブルに置いてあった食料をわたくしめが食べてしまいまして。この食事の材料もそうなんですけど。その節は大変たいへん申し訳ないことをいたしまして……」

俺は使い慣れないヘタレな敬語を使って、深く頭を下げて素直に謝ってみた。が、

「あのテーブルの上？　はお兄ちゃんのものだよ」

「は？」

「だからね～、ここでお兄ちゃんがウニューンとお祈りを捧げると、神様パワーが充電されて、あそこのテーブルにジュバっと神の実りが出てくるの」

「神の実りとはナンデスカ？」

「信徒へのぷれぜんと？」

「えええ、なんという太っ腹な。神様って信仰だけ要求して何もくれないのが普通なんじゃ……」

「それ神様じゃなくて多分悪魔だよ～、『悪魔を信仰してるとこは世界に醜い争いが絶えない』ってたしかお姉ちゃんが言ってた」

「な、なんだってぇぇぇぇぇ」

第４話　使徒

「２０年ぐらい前にこの辺りに来てね。バッシューンってこの神殿を作ってみたの。で、その後はお昼ねしてたの～」

俺はあれから素直にこの幼女様の話を聞き入ってる。

この祭壇の部屋は一応神殿だったようで、しかし神様ゆえのあまりの気の長さからか、作った後は興味を失い放置されて、そのまま２０年ほどだらだらと寝て過ごしたそうだ。

それが今回俺が祈りを捧げたのをきっかけに眼が覚めて、更に美味しそうな匂いがしたのでこっそり実体化して食べにきたそうな。

しかし何でこんなド田舎の地下深くの目立たないところに神殿をと思って理由を聞いてみたのだが、「えへへ」と笑ってはぐらかされてしまった。なんとなくだが明確な理由がまったくなさそうに思えるのは俺だけだろうか。

もしくは思いもよらないようなとんでもない理由があるかもしれない。ほんとは無いと俺は思ってるけど。

少し考えにふけって幼女様から眼を離していたが、気がつくとじーっとそれこそ穴が開くような視線で俺を見つめている。

なんというか、これは、尋常じゃあない気配が漂ってる。

俺は思わず身をすくめる。

なりは小さくても幼女様は女神様、それを忘れてはいけない。

「すごーい、お兄ちゃん、珍しい記憶持ってるね」

「！」

まさか、俺の前世の記憶を――――読まれた？

「日本？　ジャパン？　ジャポニカ？」

「ジャポニカは違う。学習帳。いや、違くはないのか」

なんだろう、いきなりシリアス成分がめっちゃ大げさに吹っ飛んだ気がする。

つい死んだマグロの眼をして〈それはないのＡＡ〉みたいな感じで手を振って否定してしまった。

刷り込まれた習慣というものはホント恐ろしい。

「さっきの料理はお兄ちゃんの故郷のものなんだね。わたしまた食べたいな～」

「うーん、でももう材料がそこまでないから。材料さえあれば一応は作れます」

「なら今から出そう？　祈りの聖句を私に唱えて～」

「聖句ってあれですか、ぶっちゃけ本当は聖句は知らなかったもので前世でのを適当に唱えてしまったんですが」

俺は冷や汗をだらだら流しているような心情で、まさしくぶっちゃけてみた。

「大丈夫。凄い祈りの力が感じられて、神様の力も沸いてきたから！」

「じゃ、じゃあ、やってみますね。失敗しても許してね」

「お兄ちゃん、準備いいよ～」

「では失礼して――――てぃび　まぐぬむ　いのみなんどぅむ　しぐな　すてらるむ　にぐらるむ　え　ぶふぁにふぉるみす　　さどくえ　しじるむ　……」

「凄いパワーが来てるよ！　後は任せて！　ぼっちりだよ」

その時、視界を真っ白にさせるほどのまばゆい光が！――――なんてこともなく、ただ例のテーブルに視線を向けると、

テーブルとかまったく見えないぐらい食料品で埋まってるし。

てか、あれに見えるはレトルトのカレーじゃないか？　なんであんなもんも混じってるのよ。

他にも日本製品らしきものがいくつか。メイドインジャパーンきたわあ。

「凄い、凄い、いっぱいでた～」

「ちょっと出すぎと思われますが」

「これでずっとお兄ちゃんの手料理が食べれるね！」

キラキラとした眼で期待されてしまったが、しかし俺は、

「うーん、多分それは無理……」

「え？　駄目なの？」

「いや、実はこれから自殺しようかとおもってたり」

えっと、あまりのことに幼女様がぽかーんと口を開けて呆けています。

俺は今までの事情をとりあえず幼女様に説明することになった。

「うっ、ううっ、お兄ちゃん可哀想……」

なんか自分が泣かせてしまったようで罪悪感がハンパない。

「というわけでもう生きてるのも無理かもしれないんだ。まあ祈りで食料が出せるなら食いつなぐことは出来るかもしれないけど税金とか払えないし」

「む」

「それと食料とかを売ろうとしても大量には無理だと思う。村の中で売買用のルートが決まってて不自然に多く売ったら怪しまれて、相場を崩した罪とか言われて商人どもにどんなめにあわされるのかすらわからないんだよ」

「む〜」

「むう……」

「あっ、だったら！　お兄ちゃん、使徒になってみない？」

「むむむ？　神の使徒ですか……また随分と大事に」

「うん、多分お金も稼げるし、三食昼寝付きだよ」

「なっ、どこでそんな言葉を（まあ予想はつきまくるけど）……えっと、お願いします」

「わ～い。使徒げっとだよ～」

「げっとされました」

第5話　魔法

「晴れて神の使徒となったわけですが」

「ですが～」

幼女神様はニコニコと笑って相槌をうっています。

なんていうか、イイね。こういうのは。

あまりにも荒んだ生活のせいで忘れてた感情が湧き出てくるようだ。

「私はなにをすればよいのでしょう？　使徒として」

「美味しいものを作って！」

とりあえずよだれは拭きましょう。幼女神様。

後、それ使徒の役目違うから。

「いや、それ料理人というかコックというか」

「ご飯、ご飯！」

幼女神様の背後に、勢いよく振られる小犬の尻尾のようなものが見えような気がするのは錯覚であろうか。

やるせない思いを抱きつつ、まずは溢れかえった食料品をチェックする為に下に降りる。

正直このままでは俺が食われそうでやばい。

手早く食べられてしかも美味しいものを見つけ出さなくては……

「幼女神様、これなるは桃缶でございます」

「桃缶～」

幼女神様は、高級な缶詰によく見られるペナペナのカバーっぽいのをペコペコと押して遊んでおられます。

なんという可愛らしさ！

爺は爺は！

ひとりノリツッコミは空しいからやめるとして、

「食べてみましょうか？　しかしこれは冷やすと更においしゅうございます。ですが冷蔵庫などはございませんから難しいところですね」

「冷たくするとおいしいの～？」

「はい。それはもう格別に。爺やに魔法が使えれば冷やしてさしあげるのですが、残念ながら爺のクラスは〈村人F〉だけで御座いますゆえ」

「えい！」

「ああっ、何をなさいます、お嬢様！」

なんだこれ、シビビっとビびれて……

ああ、やっぱお嬢様と爺やごっこはウザったかったのか？

そして俺は意識を手放した……

「でも3秒で回復したわ」

「お兄ちゃん、もう魔法が使えるよ？」

「何ですと！」

そう俺はさっきの痺れでなんと、桃缶の魔法使いになっていた。もとい魔法使いのクラスを得ていた。

「まだいまいち実感が無いのですが、さっそく魔法を使って冷やしてみることにします」

「わーい、パチパチ」

ちなみにこっちの世界、村人でも一応魔法は使える。

3時間ぐらいウンウンうなってると蝋燭の炎ぐらいの火がボーっと0．5秒出るぐらい。

……うん、役立たずだよね。

やっぱ魔法って憧れるから、結構練習はしたんだけど、どうやら詠唱とか技術とかよりもイメージ力とかクラスとか才能がものをいうらしくて、役に立つ程度のレベルにすらならなかった。

しかもこっちの世界では魔法が使えるゆえに、科学文明の発達が遅れているという有様。

まあそうだよね。大体に現象に対して魔力とかで計算しにくい結果

が出るのなら、しっかりした検証結果を必要とする科学とか発達しにくいのは当たり前。

とりあえず、氷の魔法……は、カチンコチンになると食えないし、流水の魔法……冬の川のイメージで……いや、これも水浸しになりそう。

ならば冷凍庫に３０分ぐらい入れたときの、缶の表面に軽く霜がつくイメージが丁度いいかな？

「桃缶よ。我が意に応え、冷たくなあれ！　ＢＥ　ＣＯＯＬ！」

おおお、なんか今までに無い感じで魔力が湧き出てくるのがわかる！

これが役に立つレベルの魔法の感覚なのか。

普段はジョボジョボとホースから水が出てるのを、ホースの先を指で潰して、勢いよくビューッっと出させるような感じ。男なら誰でもわかるアレだ。

それが右手に持った桃缶にまとわりついて、世界を変革していくのが手にとるように感じられる。

たちまち、その手のひらには冷凍庫から取り出したばかりのような冷たさがビンビンに伝わってくるようになった。

「やりました。お嬢様、程よい冷え加減でございます。さっそく開けてみますね」

「はやくはやく～」

「ほっ」

プルトップに爪を引っ掛けてパコッと開けると、ほのかに甘い匂いが漂う。

「では、まず爺やが先に味見をしてみます」

「えー」

「おお、これはまったりとしてコクがあって滑らかで……」

「むーーむーー！」

「白桃とシロップの冷たさが共に絶妙。口の中に含むと桃源郷に迷い込んだ気分です」

「むううううう！！！」

「なんという至福。まるで秋山の魔法にかかったかのよう！」

「えい！」

「ああっ、ガガガ、シ、シビビれれれ」

「ふーんだ！」

「こ、これはもしかしてさっきのおおお。まままさかまたもや新しいクラスを手に入れちゃったりしちゃいますかががが？」

「ううん」

やっぱそうですよね。うん。

第6話　狡猾

幼女神様は只今ニコニコと笑顔で桃缶を頬張って、というか桃缶の中身を頬張っています。

しかし油断してはいけません。

私は前回知ってしまったのです。

この方が案外でんじゃらすな性格をしていることを！

「では、わたくしめはいったん住まいのほうへ戻らさせていただきます。これからも料理を作るために色々と準備する必要が御座いますので」

「うん。はやく戻ってきてね」

「出来るだけ努力はいたしますが、なにしろ色々と問題が山積みでして3時間ほどはかかるかもしれません」

「じゃあ、行っちゃだめ」

「……」

でたよ、子供の我がままが……

『はやく戻ってきてね』と『行っちゃだめ』のコンボに微妙に萌えたのは内緒だが。

というか、我がままが可愛いのは非力な子供がやるからであって、神様にやられるとホントやばいよね。色々と。

仕方ない、ここは俺の老獪な会話テクニックを駆使して見事に切り抜けてみようか。

「お嬢様、今から上にいって、まさしく舌がとろけるような甘くて美味なるものを作ってまいりますゆえ、戻ってくるまではお待ちいただけますか？」

「行ってらっしゃい！」

ふっ、ちょろいな。

「では行ってきます。帰ってくるまでに口寂しくなりましたら、こちらの袋に入ったポテチなるものを食してください。パリパリとした食感が面白く、中々の美味しさで御座います。ただし食べすぎには注意ですぞ。2袋までにおさえますように」

「ん、わかった～」

幼女神様に手を振られつつ、ようやく切り抜けたと内心思いながら、俺は選び抜いた食材を両手にどっさりと抱えて自らのアジトへと足を運んだ。

「さて、甘いものを作ると言っておいたから、いくつか用意はしておかないと。しっかし基本的な調味料まであったのは幸運だな。これで色々と日本のメニューを再現できる」

そうなのだ。あの食材の中には、塩や砂糖のみならず、醤油や味噌、その他色んな調味料まで入っていたのだ。

ちなみに植物油は最初の食材の中にもあった。

ただ生クリームとかバターとかは今回は見当たらなかったので、お菓子を作るのにも制限がかかる。無理をすればミルクからも作れそうだが今は機材も無いし、量を作りにくい。

そこでミルクと苺と砂糖が揃っていることに気付き、一品目のメニューは自然と決まった。

日本人ならおなじみの苺ミルクである。

作り方としては苺を潰してミルクをぶっかけて砂糖で味付けという

案外簡単なデザートだが、これは素人の作り方。

苺とミルクと砂糖が織り成す至高のハーモニーはこの方法では生まれ出でえないのだから。

完成した際に、苺の部分とミルクの部分、それぞれが絶妙な甘みを独立して持ってこそ本当の苺ミルクなのだが、多くの人間たちは砂糖味のミルクに苺を潰したものを混ぜただけのものを苺ミルクと崇拝してしまっている。

結果として、ミルクの人工的な甘味と自然な甘酸っぱさの苺が、甘いだけの苺風味ミルクとひたすら酸っぱく感じられる苺部分とへ味が分離してしまうのだ。ハレーションを起こしてしまって、至高どころかただ癇癪を起こして暴れる困ったおっさん風味の味へと堕ちてしまう……これは絶対に許せない。

まあ実際には〈あまおう〉などの高級な品種を使えば苺がミルクの甘味に負けずにそれなりのものは出来るのだが、苺ミルクには安物の苺を使うということは宇宙の真理であり、それに反することは恥ずべきことなのだ。そうに決まってる。

そこでまずは苺の表面の甘い部分のみをスプーンなどで削って分離させる。量的にはそこまでなくてもいい。これはよく苺のムースなどで飾り付けに用いられる苺の部分に相当するのでバランスが重要なのである。次に苺の芯と残りの苺をミキサーにかける。ちなみにミキサーは俺の手作りだ。そこに砂糖を程よく加えてそのまま数時間置いて馴染ませる。

その間に削った苺の赤くて甘い部分を、少な目のミルクとおおめの砂糖を加えてあえておく。イメージとしてはこの部分のみで練乳をかけた苺の味に仕上げるのだ。こうしてしばらく置いたまま、最後

に両方を混ぜてミルク部分の砂糖を調節して出来上がる予定である。

さて、次は何をしようか。

もう一品作る前に、ふっくらとしたパンを焼く為の天然酵母でも仕込んでおくか。

そうして作業は弾み、３時間は瞬く間に過ぎていったのだった。

カツカツと靴音を慣らして、祭壇の部屋への階段を降りていく。

勿論、両手には至高の苺ミルクを筆頭にいくつかのデザートがのったトレイを持っているのである。

「お帰りなちゃい～」

満面の笑みで迎えてくれる幼女神様。おお、なんと神々しい……

しかしそこで俺はある異変に気付いた。

前は１０袋はあったはずのポテチの袋が、何故か今はどこにも見当

たらないではないか。

「食べてない」

「……」

「食べてないもん」

「……」

「お羽が生えて、飛んでいっちゃったの」

「……はあっ」

第7話　説得

「食べたんですね……しかもポテチをぜんぶ」

「食べてないもーん」

幼女神様は誤魔化す姿勢を曲げるつもりはないらしい。ナント嘆かわしい。

教育係として任されてから早１０年、このまま性格が歪んだ女神様に育ってしまったら、亡くなってしまった旦那様と奥様に爺やは顔向けできませんね。

「本当ですか？」

「ホント……」

ふむ、言動が小さくなる事や細かい態度などからみるに多少後ろめたさはあるようですな。

更生の余地はあるようです。ならば少し揺さぶりをかけてみましょうか。

「お嬢様、わたくしめはあれらを全て食べてしまったことを責めているわけではないのです。むしろお嬢様の身を案じているからこそ、真実を話していただきたいのです。もし食べてしまったのなら本当にほんとうにホントーウに大変なことがお嬢様の身に降りかかるのです」

「え……」

「お嬢様、気を確かに持ってよく聞いてください。まず第一にあれらはジャガイモというイモ類から出来ています。イモ類は炭水化物という過剰摂取によって脂肪になりやすい栄養素から主に成り立っています。つまり太るのです。しかも悪いことに胸ではなく二の腕やお腹がです」

「うん……」

「次にカラっと揚げるのに植物油を使用しています。これらは脂質です。こちらも基礎栄養素の中では非常に脂肪になりやすいもので注意が必要です。つまりめっちゃ太るのです。それはもう見事なほどに」

「……」

「そうそう忘れていましたが、イモ類は腸の中でガスが発生しやすく、大量に食べてしまうと……淑女としては恥ずかしいことにおならを撒き散らすマッスュィーンになってしまいます。それはもうブーブーと！」

「え……」

「特にピザ味と記してあった袋、あれは我が古の祖国では『ピザデブ』という世にも奇怪な太り病を誘発する魔の食べ物なのです。勿論、爺めの忠告通り2袋までしか食べなかった良い子であれば問題はない量なのですが」

「……良い子はだいじょぶ？」

「ええ。良い子は大丈夫です。なにしろ2袋というのは爺めがお嬢様の基礎新陳代謝から華麗に計算して弾きだしたお嬢様のお嬢様によるお嬢様のための数値ですから。用法用量を守って正しくお使いくださいということです」

俺は大げさに両手を斜め上に広げるようにして、自分の論が正しいことをアピールする。

イメージとしてはカラテキッドのあのポーズの手首を曲げないバージョンに近い。

更に駄目押しとばかりにビッと人差し指をあげて追撃をする。

「しかし……良い子でなかった場合は！」

「ば、ばあいは？」

「ハート様になってしまうのです！」

「……ハート様？」

「わたくしめの記憶をご覧いただければわかるでしょう。あの存在感、こればかりは爺やをもってしても言葉で語りつくせる自信はありません」

「……うん」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「うえええええぇぇん、ハート様いやぁぁぁぁぁぁぁ」

第8話　格闘

「坊主、見ない顔だな。なんだその貧相な身体は。魔法使いか？にしてはローブも着てないじゃないか」

「いやー、アハハ、色々ありまして。それはもう色々」

「まあ細かいことはいいやな。ダンジョンエクスピへようこそ。歓迎するぜ」

「ありがとうございます。頑張ります」

いやー、まさかケンシ〇ウを予想外に気に入った幼女神様が、格闘家のクラスを与えてくださって、更には鍛え上げるためにダンジョンまで送ってくれるとか、なんという急展開。

以下はその時の状況のダイジェスト

「ハート様も悪くないですよ？　あのたっぷりの贅肉でなんと衝撃無効のスキルもつきますし」

にへらっっと笑いながら言葉の追撃をする。

単純に太ることを悪く言うのではなく、あえて捻って良くいうことで攻撃力を倍増する。

この妙味。元来の性格の悪さをコアとして、その本能から迸る予測不能な攻撃を仕掛けるまさに無想技。

並みの者には真似できまい。

「ハート様絶対ヤッ！」

そして話はケンシ〇ウのかっこよさへと移り、

「かの者の技と同じレベルの技を再現するにはせめてスペシャルランク程の格闘家のクラスを持っていないと無理ではないかと思われます。」

「えい！」

「あががが、ままたですかがが、シビシビれないようには、出来ななななな」

「できる～けどつまんない～」

んで、ダンジョンへ送ってもらったときは

「実はうちの村の周りの低レベルの魔物の出る土地は全て村長一派の管理下にありまして、無断で狩りにいくと処罰されます。それ以外の魔物の出る場所は強すぎて自殺しにいくようなものです。よって強くなろうとしても手段が無いのです……」

「大変なの？」

「まさしく四面楚歌です。いや、どちらかというと八方塞がりの方が爺めの状況を言い表すにはあっているかと」

「じゃあ狩りにいくのにお姉ちゃんがいつも居るダンジョンを使えばいいよ。今送ってあげる～」

んで用意も出来ず飛ばされて、ダイジェストここまで。

飛ばされてはみたものの、これどうやって帰ればいいんだ？

無一文だしヤバいよね？　俺……

とりあえず今居るのは、帰還用の魔法陣型ポータルの前。

おそらくダンジョンへ外から来る人間やダンジョンから帰ってくる人間用の目標地点として設置されているものだ。

そして目の前には小規模の街とも言える程の建物の群れが広がって

いる。

その周りには城壁というには大げさだが、柵というには立派過ぎる日干し煉瓦製と思われる囲いが見える。

「おお、これってあのダンジョンゲームにちょびっと似てないか。もしかしてボッタクリな商店とかあったりして」

とりあえず帰還に関してはじたばたしてもはじまらないし、幼女神様が呼び戻しをしてくれるのを期待しておこう。なんにせよ今は金策の情報集めに街の散策といきましょか。

んじゃ、まずは手始めにあの見るからに道具屋ですって感じの看板を出しているお店を覗いたりしてきちゃおうか～

ふむふむ、なるほど。「セーラ道具店」かあ。

いかにも美人で綺麗なお姉さまが店主ってな雰囲気の名前ですね。賞味期限切れの可能性もありますが。

それならまだしも筋肉ムキムキで髭もじゃのオッサンが店主だったら俺は泣ける自信がある！

どれ、店内をちらっと覗いてみましょう。チラっとね。

おおおっ。

上品な感じにまとめられた店内のカウンターに座るは、

プラチナブロンドの髪に美しく優しそうな眼差し。少し落し気味の眼鏡が知的さをかもし出し、胸は少なくとも平均以上はあるように見える、エルフにすら負けないほどの美人なお姉さんではないですか

これは反則だろう！と叫びたい。良い意味で。

って、こっち見た！

うわっ、微笑んだ……

……女神様だ……本当の女神様がこんなところに降臨していたとは。

今の俺の顔は傍から見れば茹蛸のように真っ赤に染まっていることだろう。

決めたっ！　俺はこの道具店に毎日通うことにするぜ！

我ながら男は単純だなと思った瞬間であった。

第9話　虐待

ええっと、美人のお姉さんの道具屋に毎日通うことに決めたはいいが……先立つものがないわけで。

親指と人差し指でわっかを作って、『コレでんがな、コレ』とか言う、あの真ん丸いのが足りん。

お金が無くて店に入ったら、まんま冷やかしだからね！

まあそれでもお姉様の軽蔑の眼差しがゾクゾクするという変わった性癖の持ち主でもあればかまわないのだろうが。

ちなみにこうやって円形にすることから、日本でお金の単位は〈円〉となった。らしい。まったく役立たずの豆知識だわ。

後ろ髪を引かれる思いで麗しの道具屋の近くを立ち去る俺。

まずは親切そうな人から情報収集ってことで、さっきのおいちゃんのところまで戻る。

「あの～、すいません～」

「お。なんだ、さっきの坊主か」

「えっと、正直にいうと今一文無しなんですが、小金でいいんで稼げる場所教えてもらえませんか？」

「はあ？　俺も貧乏だから金はあげられんぞ！」

「たかりじゃあないですって」

「じゃあ強盗か？　俺の持ち物で高級品はこの絹のパンツだけだ。これだけは死んでも渡さんぞお」

「そんなのいらないですって……もういいです……」

「はっはっは。冗談はこのぐらいで。ホラ、あそこに白い石造りの建物が見えるだろう。あれがダンジョンの入り口だ。あそこの１階でスライムでも狩ってから核をギルドで売れば小遣い程度にはなるぞ。１階のスライムなら一般人でも負けないだろうが多数を相手にはするなよ」

「……じゃあいってきます。あんがと！」

「おう、頑張れよ」

おお、ここがダンジョン入り口。みたいだ。

門番っぽい人がいるな。止められたりしないだろうか。

ドキドキしつつもダンジョン内部へと足を進める。幸いながら何も

言われたりはしなかった。

入ってみると結構薄暗い。所々に光ゴケがあるのだが、それが均一じゃあないっていうのか見えやすい場所と見えにくい場所とがある。

これだとゲームとかとは違って魔物に見えにくい死角から攻撃される危険率が高いんじゃないかと心配する。

だが、さらに少し進むと明かりが設置されている大きな広間に出た。

そこには既に何組かの先客がいて、おのおのが斧や剣などでスライムを叩いている。

想像ではもっと戦いっぽいものかと思っていたが、なにやら傍目で見ると想像以上にスライム虐めっぽくて、なおかつ流れ作業のように機械的に行っているからシュールな感じだ。

やってるのも冒険者というよりかは、俺よりも年齢の低い子供たちばかりである。

手の空いている子供たちからのいぶかしげな視線をスルーして更に奥へと向かう。

この広間は狩りには適している場所ではあるが、流石にこの中で子供らと一緒に混ざってやるには少し躊躇ったからだ。

年齢的にきついのもあるが、こういう所にも俺の村のような縄張りじみた、仲間内でしか威張れない害悪にしかならない人間たちの汚い専横が生まれているはず。

つまらないちょっかいをかけられて、つまらない人間と縁が出来るのも避けたい。

大体、ゴキブリホイホイの中で多くのゴキブリと混じって小さな利益に右往左往するような感じの生き方なんてのは俺の性分じゃあないからな。

人をゴキブリ扱いするなんてとか言われそうだが、日本や俺の村でもそうとしか言いようの無い人間ばかりが幅を利かせているのは事実だ。

広間を後にするとまた視界の悪い通路が広がっている。

まだ俺のＭＰ量などを把握していないからあまり魔術は使いたくないのだが、一応視界確保はしておきたいので、候補となる魔術――

――

小さな電球のような光を生み出す、魔術としては初歩の初歩である〈ライト〉と

光の情報を増大して視界を確保する、魔物から目立たないで行動できる〈サーモアイ〉

の２つから選ぶことにする。

このうち個人行動であれば〈サーモアイ〉が適しているようだが、使ったことが無い上に消費ＭＰも把握していない。第一レベルも低いので俺のＭＰも元から低いはず。

なら消去法で、当然使うのはこれしかない。

「大いなる神の光は我が道をも照らす。〈ライト〉」

以前魔術を勉強したての頃に使った〈ライト〉の呪文とは格段に光量と持続時間の違うその効果に目を見張る。

魔法使いのクラスを持っているかいないかではここまで差があるのか。

幼女神様、さまさまである。

照らし出された通路の奥には、丁度階段状の窪んだ部分に何匹か一緒にまとまっているスライムの上部が見える。

もしあの部分に灯り無しで足を踏み入れていたら、死ぬまではいかないにしてもそれなりのめにはあっていただろう。

さーて、初対戦といきますか。

第１０話　逃亡

きつい。ちょっと考えればわかると思うが、スライム相手に刃物を使わずに素手で格闘とかなんて無理ゲー。

こいつら動いているときは、髭剃り用ジェルみたいな柔らかい雰囲気がするのに、攻撃あてた感触はまるで自動車のゴムタイヤだ。

敵の背が低いので主に蹴りで攻撃するのだが、レベルの低い俺では攻撃が通りにくい。

魔法でやればいいのだが、ＭＰ温存を意識して最初は格闘で挑んでみた。

で、何故効率の悪い格闘での攻撃を続けているのかというと――――気持ちいいのだ、身体がスムーズに動くところとか、でかい打撃音とかが。

「格闘家のクラスすっげえ」

蹴りを一度放つごとに、身体が新しい動きを見せてくれる。

軽く力を入れる度に、身体のあちこちの筋肉が喜びで悲鳴をあげる。

動作の一瞬一瞬に、最も適した姿勢と力の入れ具合が自然と理解で

きてしまい、その通りに身体を動かすと、まるで体中で筋肉の喜びが乱反射しているような感覚に浸れる。

最初はただ足裏で蹴るだけだったのが、段々と踵や足刀、つま先などでの攻撃が巧みに入り乱れ、決定打は得られないものの、何度も手数、いや足数を稼いでいるうちに慣れたせいか蹴りの威力が徐々にあがってきている気がする。

そして攻撃をしている中でわずかに手ごたえが違う部分があるのを見切り、その部分を集中的に蹴ることにする。

「うおおおおっ、パクリ拳っ、東斗百裂脚」

脚が百本もあるようにすら見えると思いたい速度で足技を連続で繰り出す。

踵で大きく抉り、足刀でかき分け、つま先で深く抉る。何度もそのコンボを繰り出しているうちにスライムの弾力に負けずに周りの邪魔な部分が押しのけられて、核が浮き出てくる。

最後につま先で大きく抉り、核の下にまで達した右足の親指をデコピンのような感じで跳ね上げて核を弾き出し、すかさずキャッチする。

「ふう……いっちょあがりっと」

ちょっと大きめのビー玉みたいな核を確認するように眺め回し、

そして一息ついた後に俺はようやく後ろが騒がしいことに気付く。

「すんげー、なんだよあの技」

「スライムを蹴りで倒してる……」

「百裂脚だってよ。かっけー」

「でも俺らと効率変わらないな」

「だね」

……かっ、悲しい……

あの広場から近い場所で、少々？五月蝿くし過ぎたようだ。

短慮だった自分の行動を少し反省して、先を急ぐことにする。

幸いまわりのスライムは鈍足なので、踏み抜いたりしなければ通行の邪魔はされない。

不自然にならない程度の速度でがきんちょらから逃げるように奥へと移動する。

男ってこういう時はバレバレであっても格好を取り繕おうとするもんだよね。どうでもいいことだけど。

移動中も適当に１匹で居るスライムを見繕いながら戦い、１階の端っこ、階段のある小さな部屋にたどり着く頃には、核の数は大体３０個程になった。

「で、なんでふたつ階段があるんだ？」

ひとつは緩やかな階段。

もうひとつは底が見えないほど深い階段。

多分だがこの深い階段は熟練者用の階層のショートカットではないかとあたりをつける。

俺が選択するとすれば緩やかな階段の方なのだろうが、そもそもいく必要があるのかということも考えるべきなのだが。

以前に聞いたことがある話からすると、今の所持核は大体１個が１００ルトぐらいだと考えて３０００ルト程度である。

これだと数回食事をするのは余裕だが、宿代にはかなり辛い。

このままここでスライム虐めを繰り返すのもありだが、目標として余裕の出来る金額、１万ルト以上を目指すとすると、倒すのも探すのも時間がかかるスライムだと難しい。

「うむ、行こう！」

俺はいそいそと下へと続く階段に脚を踏み入れた。

第１１話　技名

モソモソ、モソモソ。

今俺の目の前でモソモソとしているコイツ。

こいつは確かラージバニー。俺の村周辺でも見かける雑魚魔物の一種である。

しかし雑魚とは言っても、ウサギというには大きすぎる体躯を使った強烈な体当たりは子供であれば動けなくなるほどのダメージになるだろうし、そのまま倒れていると大きな歯で食いつかれるというあまりよろしくない攻撃をしてくる多少厄介な魔物である。

１階でスライム虐めをしていたガキんちょらには少しきつそうな相手。

１匹であればなんとかなるんだろうが、一見安全無害そうなこいつらはゲームでいうリンクモンスター。

必ず５匹程度の集団で行動をし、わずかでも攻撃の意思を見せた者には集団で攻撃をしてくる、リンクモンスターどころかリンチモンスターだろ！と思わず突っ込みたくなる習性を持っている。

なのでただ眺めているだけなら比較的安全なのだが、いざ手を出すとなると勇気が必要であったりする魔物なのである。

俺も例に漏れず、さてどうしようかと攻撃を躊躇していたのだが、既にスライムでウォーミングアップされた足技で、まず2匹を目安に即効で蹴り抜いて、後はなんとかやりぬくという即興の作戦をたてて足を踏み出した。

「飛連脚！」

本当は技名など叫ぶ必要はないのだが、今回は景気付けで。

もっとも叫んだのも既に飛び込んで2匹を足蹴にしたその瞬間を見切ってだ。

流石に、当てる前に叫んで、見事に避けられるお約束は自重した。

それでも攻撃前に叫ぶことによって相手が一瞬ビクッと行動不能になる効果も期待できるから、タイミングさえ見誤らなければ攻撃前に叫ぶのも悪くはないかもしれない。

ちなみに今回の飛連脚、一匹は右足つま先での飛び蹴り。もう一匹は左足踵での打ち下ろしに近い蹴りを同時に行う、両方を組み合わせた技である。

日本人だった頃や、格闘家のクラスを得る前の俺ならば絶対に無理に近いような技だが、やはり今の俺ならば楽に出来るようで、空中での両足の軌道も体重移動も、そして着地もまるでカンフー映画でも見ているかのように華麗に決まった。

「おっと」

着地と同時に他の3匹のラージバニーが足をめがけて突撃してくるのを、すかさず上空におおげさに飛んでかわす。

そうすると向かってきたラージバニーへと下に蹴りを入れるだけで倒せる理想的な状態になっていることに気付き、そのまま体重をかけた蹴りで2匹を素早く踏み抜く。

更にもう一度飛んで最後の一匹をサッカーボールキックで蹴り倒す。

1階のスライムとは違い、ラージバニーの方は体重をかけた蹴りで簡単に一撃でケリをつけられた。

「こいつは旨いな。相性がいいってヤツかね」

倒れたラージバニーらの核をつま先蹴りでもぎ取りながら、そうごちる。

「なんか楽しいわ、これ」

飛んでは蹴って、飛んでは蹴ってを繰り返す。

あれからひたすらジャンプアンドキックだけでラージバニーを倒しまくった。

核の数は既に二百を超えるだろう。

ポケットに入りきらないので上着を脱いで風呂敷のように包んでいるが、少しみっともない感じがする。

「いったん帰るとするか。換金や宿の手配に時間がかかると野宿になるからな」

目の前に広がる15匹ほどのラージバニーの遺体を眺めながら、そう呟いて1階の階段へと足を繰り出した。

第12話　職員

俺は今冒険者ギルドの目の前に居る。

ギルドの外観は――――それっぽくないというか、酒場みたいになっていて入ったら全員に睨まれるような感じかと思ったら、普通の商館みたいだった。

改めて思えば、さっきの子供たちでも利用している場所なのだから、そこまで無法なわけもないかと納得しつつ、少し緊張しながらも扉を開けて中に入る。

入り口近くの受付のような場所に居た、年配の柔らかい感じのおばさんに声をかけてみた。

「えーっとすいません、魔物の核の買取ってどこでしょうか？」

「それでしたらここの突き当たりの部屋の中でやってますよ。ここのギルドカードはお持ちですか？」

「いえ、持っていないです」

「なら作ってからの方がいいですよ。買い取り額が少量ですがアップしますので。簡単ですから手続きを済ませてしまいましょうか」

「じゃあお願いします」

手元の魔道具らしきものをちょいちょいと操作する職員さん。随分手馴れた様子である。

「では、ここに指を入れて5秒ほどお待ちください」

言われたとおりにゴツイ魔道具に指を入れる。少々不安な感じもしたが特に何も無く5秒が過ぎた。

「もういいですよ。これで登録は終了です」

「なんか簡単ですね」

ニコっと笑う職員さん。若い頃は美人だったろうな～と思わせる微笑に和んだ気分にさせられる。

「これが身分の証明用のカードで、注意事項などはこの小冊子に全て書いてあります。冊子は貸与なので後日読み終わったらはやめに返してくださいね」

「あ、はい」

思ったよりもはやくスムーズに登録が完了した。

とはいえ、宿の手配もしなければいけない俺はゆっくりもしていられない。

買い取り用の部屋らしいところに足早に歩き、無心でドアをあける。
部屋の中には３つほど窓口があり、人がいるのはそのうちのひとつ、４０ぐらいのおじさんの窓口だけだ。

「あのー、魔物の核の買取お願いします～」

「ほいよ、じゃあこの容器に入れてくれ」

俺は風呂敷もどきの上着のきつくしまっていた結び目をいそいそと解いて、貰った指定の容器の中にばらっと広げた。

「お、結構取ってきたね。この大きさだと殆どラージバニーか。大変だったろ？」

「ははは、まあそこまでは。一応クラス持ちなんで」

「ほお、クラスって戦闘系か」

「そりゃそうですよ、〈村人〉のクラスは普通はクラス持ちとは言いませんから」

「はっは、確かにそうだ」

おじさんは言葉を交わしながらも手は休めない。

おお、職人だ。いや、職員か。

受付の婦人もそうだがここの職員さんは対応がはやくて、あたりも柔らかいし感じがいいな。

俺の村の奴らとはえらい違うな～と和みつつ――――まあ人は皆、利害関係のしがらみで生きてるからほんのちょっと歯車が掛け違えばこの先どうなるかは分からないな。

人は素晴らしく、そして怖い。

そんなことを考えていると精算終了の声をかけられる。

「スライム核が1個100ルトの32個、ラージバニー核が1個200ルトの237個で合計が50600ルトだ。どうする？　カードに貯めておくか？」

「2万と端数だけ現金で貰えますか。　後はカードで」

「おうよ。少し待ってな」

おじさんは出したカードを受け取りつつ、カチャカチャと魔道具を操作している。

大して待たされずにカードと現金が差し出される。

「ほら。またこいよ」

「どうも〜」

そして軽く手を振りながら部屋を後にした。

さて、後は宿の手配か。

第１３話　恐怖

ギルドの受付の婦人に相談をして紹介された宿に来てみた。

なんでも妹さん夫婦がやっている宿屋らしい。

パステルピンク色をふんだんに使用したちょっと少女趣味な外観には引いたがさっそく中へと入る。

前にいる女性が妹さんだろうか。

ちょっとだけ顔立ちが似ている気がする。

「こんにちわ。泊まりたいんですけど部屋空いてますか？」

「いらっしゃい。シングルだったらまだ空いてるわよ。一泊４０００ルトで朝夕食事がついて５０００ルトになるわ」

「ああ、よかった。実はギルドの受付の女性に紹介されてきたんですけど」

「あら、姉さんの紹介？　なら一泊３５００ルトでいいわよ。食事はまけられないから付けると４５００ルトね」

「予定がまだわからないんですが、とりあえず一泊食事つきでお願

いします！」

「まあ、元気がいいわね。分かったわ。食事は部屋まで届けるけど、居ない時には下げてしまうから注意してね。声をかけてくれれば少し遅れても食べられるけど、あまり遅くなってから言われてもたいした物は出せないから勘弁してね」

「はーい」

よかった。これで一応は当面の危機的状況は乗り切った。

しっかし考えてみると、幼女神様ひどいよ。

いきなりダンジョン近くに飛ばしてくれちゃって、どうやって帰ればいいのやら。

ここからあの村まで帰るのには乗り物を乗り継いで帰れるのか……疑問すぎる。

「おまたせ。これがおつりね。それとリプの間の鍵を渡しておくわね。部屋は階段を上がってすぐのところよ」

「わかりました～」

ちなみにリプというのはこちらで人気の高いフルーツの一種だ。それが部屋の名前に使われているのだ。うん、嫌な予感がする。

疑心暗鬼にとらわれつつも、俺はあてがわれた部屋へと足を運んだ。

「ううっ、これは」
窓枠がピンク色だし。
クッションがハート型だし。
小物がいちいち可愛いし。
これ女性用の部屋じゃないか？
清潔感は高いんだけどね！

部屋を間違えたというわけではないんだろう。多分全部がこんな感じの部屋なんだろうな。
何故何故、ダンジョン探索で魔物を殺しまくって帰ってくる宿がこんなにファンシーなんだ。
雰囲気の格差が激しすぎて、頭の中がハレーションを起こしそうである。
まああくまでちょこっと自分の中で整理がつきにくかっただけで、これでも適応性は高い方だと思ってるから、ちょっと苦笑して言ってみたかっただけだけどね。
「さて、食事までは時間があるし、かといって横になるにも寝てし

まうと食事の時に起きれるのかが心配。なにで時間潰そう……？」

ボスっとクッションに腰を落としてもたれかかりつつ、そんなことを呟く。

（そういえばここってお湯とかのサービスあるのかな。少しダンジョンで汗をかいたから綺麗にしてみたいけど）

思い立ったが吉日。

さっそくおかみさんのところに聞きに行く。

「まあ。私としたことが言い忘れていたわね。なんとここにはシャワーがあるのよ。男女用に2部屋あるからいつでも入っていいわよ。でも女性用に入ったら怖い目にあうから注意してね、うふふ」

怖い怖い、おかみさん、眼が怖すぎるよ。

第１４話　子猫

シャワー室もまたファンシーな雰囲気のものだったが、清潔な感じは素晴らしかったし、設備的にこういうのが揃ってること事体が珍しく、俺にとってはここに泊まれたのは非常にラッキーであると言えるだろう。

夕食も幼女神様の恵みの食料品よりは一段ランクが低いが、それでも村で食べていたものとは雲泥の差で凄く美味しかった。これが毎日でもいいくらいだ。

色々とあった一日だったんで、食事の後はすぐにベッドで横になり睡魔に襲われて抵抗も出来ずに眠りについたわけだが。

で、目を覚ましたら何故か今、俺は子猫を抱いている。

女性を言いあらわした〈子猫ちゃん〉のほうではなく、

本当の毛むくじゃらの――――いや、ふわふわで無駄にありえないほど可愛い感じの子猫様である。

「どこからきたんだい。この子猫さまは」

鼻の頭をつんと触れるように軽く押してやりながら、返事など来るわけも無い問いをぶつける。

「み～、みぅ～」

こういうのを鈴を転がすような声と言うのだろうか。

「よしよし、おー、可愛いな～。ここの飼い猫かな？」

「お兄ちゃ～ん。お腹減った！」

「う……あ……？」

「ご飯、ご飯～」

「子猫が喋った！　じゃなくて幼女神様が子猫！」

「お腹減ったの～」

「って、何言ってるんですか。昨日はあれからどんだけ酷い目にあったことやら」

「お兄ちゃん、酷い目にあったの？」

「う……いや、よく考えるとそれほど酷くもない気もしないでも無いかもしれない様な」

「じゃあ、ご～は～ん～、食べにいこうよ～」

「仕方ないですね。でもその姿はどうしましょうか」

「人の姿の方がいいの～？」

「……幼女神様の人間バージョンは可愛すぎますからね。この街にいる時は変な人たちに目を付けられないように猫のままの方がよい気がします」

「みゃ～ん」

「それと念話は出来ますか？　自分は出来ませんが幼女神様の力でなんとかなるのかな」

《これでどう～？　聞こえてる、お兄ちゃん～？》

《ばっちりです、聞こえてますよ。そちらはどうですか？》

《こっちもばっちりだよ。早く早く～。ご飯食べに行こうよ～》

《この宿は朝食もついているんですよ。運んできてくれるはずですからそれを食べてからにしましょう。昨日も食べましたが結構美味しかったですよ》

《わかった～、はやく来ないかな～》

《あ。でも幼女神様が猫の姿でも一緒に居るのはまずいかなあ。動物とかは食事を扱うところでは嫌われるから》

《わたし猫じゃないもん！》

《わかってますけどね。とりあえず飼っている猫がついて来ちゃったと言う理由で宿のおかみさんのところに断ってきましょう》

《ふにゅ～》

幼女神様子猫バージョンを懐に抱えて、おかみさんの所に顔を出す。

「あの～、この…」

「！　きゃあああああああ！　可愛いいいいいいいいいいいいいい！」

「……えっと」

「なっ、なに、この子！　君の猫なの？　いや～ん。なんて可愛い子猫なのおおお」

《ちょっ、おかみさんテンション高すぎ！》

《くねくねしてる～》

第１５話　冷静

子猫様の件はうやむやのうちに、適当に宿に泊めても問題ないように話が運んだ。

食費も追加は無しだという。むしろ人間様より豪華かもしれないものまで出してもらって、なおかつおかみさんがこちらにお金を払おうとするかのような勢いだ。

子猫様のラックの数値ハンパねえー。

これが間近で感じるヒエラルキーの味かと俺の繊細なハートが少し傷ついたものだ。

それはともかく今日の予定だが。

昨日に引き続きダンジョンにいくのは決定として、その前に――

魔物の核を入れる袋を道具屋で買う必要がある。これは重要だ。

それと怪我をしたとき用の回復ポーションを道具屋で買う必要もある。これも重要だ。

それに道具屋のおねーさんの名前を聞きだす必要もある。これが一番重要だ。

なんと！全部必須の事項は道具屋関係ではないか。

偶然だな～。いやはやなんとも。

というわけで、子猫様を肩にのっけてレッツゴー！

《ごぉごぉ～》

やってきました、セーラ道具店。

昨日は文無しで躊躇して入れなかった店内へと、ドアチャイムをカランコロンと軽快に慣らして身を入れる。

「あら、昨日の子ね。いらっしゃい。可愛い猫ちゃんを連れて今日は何の用かしら？」

（おおお、なんということだ。声まで魂を奪われるほど綺麗なんだ。しかも近くで見るとますます美しい。しかも俺を覚えてくれていたとは。う……き、緊張するなあ……）

「えと、今日は、魔物の核を入れる袋を買いに来ました」

「核用の袋ね。安いものが５００ルトで少し高い丈夫なものが２５００ルトよ。お勧めは長く使うつもりなら高い方ね」

「じゃあ、えっと、高い方お願いします」

「み～、みぃ～」

「うふふ、わかったわ。他には何か欲しいものはないの？」

（ああ～、微笑がなんて魅力的な――――もう俺は駄目かもしれない……恋に堕ちてしまいそうだ）

「んと……回復ポーションを、お、お願いします……」

「初心者用のでよいのよね？　１個１０００ルトだけれどいくつ必要かしら」

「３つ……いえ、５つ……で」

「今のところ全部で７５００ルトになるわ。これで全部でいいのかな？」

「は……い」

（オイオイ！　名前を聞くんじゃなかったか、俺って馬鹿ばかああ、へたれめえええええ）

おずおずと手持ちのルトを差し出す俺。

「はい、じゃあこれ。ポーションは袋の中に入れておいたから割らないように注意するのよ？」

「はい、あ、ありがとうございます！」

最後にお釣りを貰って――――

「ふふ、またきてね」と言われたと同時に手をぎゅっと下から包まれる様に握られる。

その瞬間、俺の全身の血が逆流する。

（や、柔らかくてあったかいぞぉぉぉぉぉぉぉぉ）

しかし逆にこのことが幸いして俺は冷静になった、いや、ようやく本来の自分を取り戻せたというべきか。

自慢の灰色の脳細胞がフル回転して警告を鳴らす。

俺のいままでの不幸から考えて――――こんなウマイことがおきるわけがない。

そうだ――――これは何かの罠かもしれない。

あの村の皆が仕組んで俺を騙そうとしてるんだっ！

そうか、そうだったんだ！

冷静にィィィ！

落ち着いてェェェェ！

考えて見ればァァァアアアァァァ！

なーんで気がつかなかったあーーーっと思うぐらいっ！

簡単なっ！――――

――事だっ！

こんなにもっ、優しくて！魅力的で！美しい人が！

――女性――――のわけがないじゃないか！

ということは、この人は――男――

――男――男――男

――あれがついている――男

「うっ」

「うん？」

「うわあああああああーーーーーーーーーーーーーー！」

「ど、どうしたの君！」

俺は道具屋を飛び出して走り出した。

子猫様と袋を抱え、ただひたすらに。

第16話　同属

頑張りました。

俺は頑張ったんだ。

――――本当に無駄な方向に――――

何が冷静だ！

酒に酔って真っ赤っかな顔をしながら「よっれない～、おれはよっれまーせーん～」とか言う酔っ払いと同じじゃないか――――

えーっと、あれです、あれ、結局は単に恥ずかしくて混乱して暴走したわけですよ。うん。

そう、俺も男だから、綺麗なお姉さんは大好きですよ？

でも流石に顔で惚れたりとか、笑いかけられただけでは惚れませんよ。

惚れた腫れたやらはちょい悪ノリしただけなんですってば。

やっぱ人は中身ですから。

ですからそれほどさっきの醜態も気にしてません。

まっ、細かいことはもう置いておくことにして。

いや、もう許して！

……問題は次にあの道具屋には行きづらいってことぐらいですし。

そんなことをだらだらーっと考えつつ、既に八つ当たり気味にラージバニーを３００匹ほど葬っていたりする。

こいつらも八つ当たりで倒されるとはなんと不憫な……

「飛燕連脚！」

ふっ。今はもう使ってる技は〈飛連脚〉ではない。〈飛燕連脚〉だ。

そう、技がバージョンアップしたんです！

もとから我流だから創作したとも言えるけど。

何故〈燕〉の一文字が付いているかと言うと、かの巌流島の決闘で有名な燕返しをモチーフにしたから。

ここで勘のいい人ならもう解るだろう。

この技は飛連脚の技を繰り出した後に両脚を鋏のように交差させて、その勢いで再度蹴りを繰り出すのだ。

ただし体重移動がおそろしく難しくて、昨日は技のイメージはあったのだが出来なかった。

鑑定してみないとわからないが、狩りまくってレベルもあがっているのが今日出来るようになった原因であろうかと予想。

もうね、バニーなんて瞬殺すぎて。

倒すより核を集める方が時間と手間がかかってしんどい状態。

んで、幼女神様は只今俺の腕の中で子猫状態でおねんね中。

朝食を食べた後から口数が減ってたと思ったら、ずっと眠たがってたらしい。

まあ女神様といえど子供であるからして、やることといえば食う寝る遊ぶの三つで要約は足りるようだ。

しかし激しく動かさないよう注意してはいるとしても、よくもまあこれほどの戦闘状態で眠れるもんだね。

お昼時だから幼女神様が眼が覚めていたら何か食べに行こうと思ってたんだけど、これはもう狩りを続けてもいいかもしれない。

ここの次のランクの敵の情報ももう手に入れているし。

ギルドで借りてる冊子の初心者用のダンジョン解説によると、この次の階のパープルウルフは一応ウルフの名前はついているが、実際にはその最底辺の亜種。

大型犬程度の強さということだ。

性質は元の世界でのハイエナのイメージで、気性が荒いというよりはとにかく色々汚い。個別行動を好むのだが孤高じゃなくて協調性がないだけ。縄張り争いで喧嘩が絶えなかったり、他の個体の食料を奪いあったり、強い敵にあうと素早く逃げて、ＰＴなどでいくと必ず後衛をターゲットにする、細かいことはやってみないとわからないがそんな感じらしい。

……これは俺の大嫌いな性格をしている敵だな。

同属嫌悪じゃないよ？

ある意味、好機。

まだ少し心の奥でくすぶってる恥ずかしさの憂さ晴らしの！

ふっふっふ。徹底的に駆逐してやろうじゃないか。まってろよゴミども。

道を少し戻って先ほど通ったときにあったそれらしい岩陰に階段を確認し――――ツカツカと中ほどまで足を進めると、もう既に三階の地面が階段下に覗き見え、更に〈ライト〉の魔法の光で気付いたのかこちらを不機嫌そうな顔で睨んでいるくすんだ紫色の犬みたい

な魔物も見えた。

（今度の標的はアレか。なるほどそれっぽい顔つきをしている）

階段を飛び抜かすような勢いで一直線に駆け下りた俺は、その勢いのままにパープルウルフに飛び蹴りを食らわした。

第17話　狙撃

「どうもやりにくいなあ……まあ、ラージバニーに比べるとっ、だがっ！」

パープルウルフはラージバニーに比べ、見かける数は少し多い程度で、

倒すのにも相手が逃げなければ一撃。

走り回って速度をつけて、標的を見つけたらすかさず逃げる前に蹴りを入れて倒す。

核はバニーよりははずしやすい部分にあるので楽。

と、ただそれだけなのだが。

「こいつら逃げ足速すぎだろう……」

普通はまあこの手の動物に人間が走る速度でかなうわけがないんだから仕方ないけど、

今の俺だとそれなりに併走できるほどのスピードが出せる。

でもそれでもトドメをさせるのは2匹に1匹ほど。

倒せた方の敵はいいとしても、倒せなかった敵のほうの時間をかけて追い回してそれでも逃げられた時の虚無感はなんともいいがたいね。

これだと綺麗に倒せるラージバニーに比べると、ウルフ相手は歯がゆくてスッキリしないなーなどと言わざるをえない。

それと特に気分悪いのは、このまとわりつく視線――――

通路の影とか、〈ライト〉の光が届かないギリギリの領域とかで、こちらを観察するような視線をいくつも感じる。

こいつら行動は単独なのに、獲物を取り合う汚さがあるから、擬似的に集団行動の利点も得られるんだよな。

この、犬っぽいのに群れで追い詰められるって感覚は――暗闇に犬の眼がいくつも光って見える状態ってのは、前世の日本人の祖先の記憶なのか本能的にいやーな感じが付きまとう。

バニーはノンアクティブだから群れを倒したら一息つけたが、パープルウルフはアクティブで狩場で休みにくいのも気に食わない。

「はあ～。やっぱ、ラージバニー狩りに戻ろうかね」

軽く地面を蹴って小石がコロコロと転がる様を見て、そう呟く。

（ん……）

インスピレーションに導かれるままにその小石を拾い、手の中で弄ぶ。

子供のたわいない遊戯のように、曲げた人差し指に小石を挟んで親指で弾いたその飛礫は――――遊戯とはとてもいえない速度で土壁へとめり込んだ。

「……指弾か、コレいけるかな？」

ビシッっと弾き出された小石がパープルウルフの尻に突き刺さる。

「キャン」と鳴きくずれる奴らを尻目に動きが取れにくくなったところを蹴りでトドメを指す。

あれから１５０匹程のパープルウルフを狩った。

狩り効率としては指弾を使い出してからはもうラージバニーに並ぶ程度にはなっているはずだ。

小手先の技術を使わずに、全部勢いにまかせての蹴りでカタをつけられればもっとスッキリするだろうとも思えるが、この低威力中距離攻撃と言おうか、指弾という攻撃手段に慣れる練習だと思えばそれも気にならない。

やっていることはそれほど高度な技でもない。
しかし格闘家のクラスを得てから小さな動きひとつひとつがそれを重ねる度に洗練されていく。
才能が――ただの単調な狩りを高密度の訓練へと変容するのだ。
なんの変哲も無い石ころを指で弾くという動作を繰り返すだけで、どんどんと命中率と威力を上げる弾丸と呼べるものに変わっていく。

しかしあれだ、こうしてきゃつらめの後ろから指弾を叩き込むとですね――――

――――ときどきカマを掘ってしまうのはご愛嬌で。

ふふふ。

いえ、狙ってませんよ？

すべて偶然ですってば。

第18話　視線

クキッ、クキッっと。

「いや～、見事に穴が開いちゃったな。あれだけ酷使すりゃ当然なんだけどさ」

革靴のつま先の穴から見事にのぞいた足の親指を、曲げたり伸ばしたりを繰り返しながら眺める。

なーんかつま先が敏感になってきたな、格闘家って感覚も鋭敏になるのか～っと思ってたらコレだよ！

幼女神様がお起きになられたのと、俺の愛用の靴が壊れてしまったのが同時に発生してしまったので、まだオヤツ時前ぐらいだが適当に狩りを中断して街へと繰り出すことにする。

例のごとく、幼女様が「ご飯～」とか「お腹減った～」とか五月蝿いからだ。

で、帰路にあの1階の広間を通ったときに、何やら子供たちが揉めている場面に遭遇した。

感じからすると新しくここで狩ろうとする子供と、今まで狩っていた子供の縄張り争いのようだ。

（まったく……こんな小さなうちから随分と醜いもんだ。スライムぐらい皆で仲良く肩並べて狩れよ、ウッゼェェェェーーー）

と内心で毒を吐きつつ、

やっぱりあそこで狩らなかったのは正解だったなと思いながら足早に立ち去った。

《さてっと、幼女神様。ガッツリ食べるものとデザート的な甘いもの。どっちが食べたいですか？》

《うーんとね、両方！》

《……ですよねーーーやっぱり》

《うん！》

《どこかのお店に入ってもいいんですが、猫の姿だと食べにくいでしょう。ならば商店街の方にでもいって美味しいものを物色でもしましょうか》

《するの～》

道行く人の歩く方向にも流れがあって。

この時間は見るからに主婦というような買い物籠を持って出歩く人たちがある一定の方向に多く流れていっている。

それを辿れば当然――――

《ここがこの街で一番の大通りっぽいですよ？》

《あれ！》

この大通りについてすぐに、気の早い幼女神様がまっさきに欲しがったのは３、４人ほど人が並んでいるところで売っている焼肉乗せパンである。

《では並んでみましょうか》

俺としては並んで買うようなのはいつになったら順番になるんだろうとマイナスな方向に考えてしまうのであまり好きではないのだが。

なにしろ幼女神様の仰せでもあるので、たかだか数人程度なら気にするほどでもないので素直にさっさと並んだ。

いやさ、日本に居たときにスーパーとかでどこのレジが早く終わるかな～と思って、熱心に並ぶところを選んだ時ほど、何故か一番待たされるとかいう経験が多いのがトラウマになってるわけじゃないよ？

ほんとホント。

ただ並んでいるのも暇なのでついでに周りの商店も見回してみる。

あの宿の部屋の名前にもなってる果物のリプやら、神殿で最初に食べたリンゴもどきのティーアコも売っている。

いくつか買っていって、適当に摘むかな～

っとそう言えば一応聞いておこう。

《えっと、幼女神様はフルーツはお好きですか？》

《うん！》

《じゃあ、お肉は好きですか？》

《うん！》

《では、おサカナは好きですか？》

《うん！》

《さいごに、お野菜も好きですか？》

《うん！》

オッケー、幼女神様の嗜好は全て把握した。

既に聞くのも愚問だな！

「何だろ？」

さっきから妙に視線を感じる。

幼女神様がそれはそれは非常にひじょうに美味しそうに――――もゆもゆと表現しにくい音を立てながら色々なものを俺の手渡しで食べている姿は、既に周りの主婦や女子らの生暖かい視線を集めまくってはいるのだが。

俺が気にしているのはそれとは別。

最初はパープルウルフの時に感じたような嫌なものではないので無視をしていたのだけど。

こちらもヤツラと同じく複数の視線なので気にかかってきたのだ。

この感じは……

敵意のある視線でもなく、殺意の乗った視線でもない。

何かこう、深い悲しみの混じった諦めのような感情がまとわりつい

た視線――――

――――そう、これはまるで少し前までの俺のような――――

第１８話　視線（後書き）

年越し、そして新年です。
準備に忙しくて更新しにくいです！
ということで今日はこの２話でおしまいです。
ではまた来年に～

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9140z/

ウチの倉庫の地下に神殿がある件について説明を求む

2011年12月31日16時49分発行